

同窓生 シリーズ

④④



第41回生 小中ももこ氏

'89年 本校卒業
'94年 津田塾大学 学芸学部
国際関係学科卒
同年 (株)フジテレビジョン入社
現在 編成部に勤務中

相変わらず混みあつた駅構内から地上へ上がり高層ビル、大きなビジョンに囲まれる時、私は何とも言えない安堵感に包まれる。新宿駅—この、いつまでたつても小汚い喧騒の中心地こそ、私の第二の故郷なのである。86年、春。私はチェックのスカートに赤いハイソックス、という後の友人の証言を借りれば、「嫌でも目に飛びこんでくる姿」でまっ青な空の下入を新宿高校の大きな懐が初日から包みこんでくれたのである。

以降、懐の広い先生方、懐の広い友人たちに恵まれ、私は何の躊躇も反省もないまま、陸上部、有志ミュージカル、バンド(ほんの少し)とやりた放題の高校生活を過ごさせていただいた。日々重ねた出会いの数々が現在の私を形成している。ある日の世界史の授業で初めて耳にした、「従軍慰安婦」の言葉。当時、教科書にはもちろんのこと、マスメディアにもほとんど登場することのなかった事実を教えられ、大きな衝撃を覚えた。それまでも心に引っ懸

かっていた在日韓国・朝鮮人の問題などと相まって、自分の問題意識が急激に一点に集中されていく経験をしたのである。大学に進学した後も、この体験が基礎となり日本の朝鮮支配政策を中心に学びつつ、初の韓国旅行、大学のご近所だった朝鮮大学校との交流など朝鮮の文化と歴史の吸収に終始した。ベルリンの壁崩壊、ソ連の消滅、と世界の中で分裂と統合が盛んに行われていた大学時代、新時代を迎えるに値する国となるため、日本は改めてそれまで封印し

てきた問題の数々に真正面から向きあわねばならなくなつた。混沌とした時代にも様々な難問と向きあう覚悟と分別を与えてくれたのは新宿高校で培った精神であつた。現在フジテレビでの仕事においても、解決できなかつたか否かは別に(大切なことだが)問題から逃げない覚悟だけはあつたように思う。「同窓生」シリーズに登場させていただくというこの上ない光栄な権利をいただいたことを機に自分を振り返ってみると、新宿高校の広い懐に常に抱かれていたことが力の源である、と気付いた。職場にて、社内各部署間の交通整理、タレント事務所との向き合いが主な仕事となつている今、日々、様々な決断を迫られる。覚悟を決めなければならぬ瞬間の連続である。そんな時、

あの何千、何万もの生徒たちの汗と涙がしみ混んでうす汚れた新宿高校校舎を思い浮かべるだけで勇気千倍となるのである。番組の企画会議、という場において、自分が立ち上げたいと思う番組についてプレゼンテーションをする時がある。様々な意見を持つ人々、しかも私の何倍も説得力を持つ人々に立向かう時、自分の価値感に対し自信を失いそうになる。特に日韓をテーマにした番組に關する提言をする時、まだまだ尻ごみしてしまう人が少なくない。これが多数派の意見なのか。これが正論なのか。自分を疑わずにはいられなくなる。もちろん全てに完璧な判断力を私が持っているなんてことは有り得ないし、私はどちらかと言えば判断力に欠けた人間だと思ふ。しかし、新宿

高校の広い懐の中で培つた精神—あらゆる主義、主張は尊重されるべきであること、真実を追求し続けるため澄んだ目と心を持ち、断固たる覚悟でそれを守ること—を私の武器とする時、恐れと不安は消え、より健全な解答へと近づいていくことが可能となるのである。新宿高校がどんな高層ビルに囲まれ視界を遮られようと、どんなに私が様々な問題に行く手を阻まれようと、「新宿魂」が生きづいていて、私にとって、そして新宿高校にとって二十一世紀は明るい、と信じて疑わないのである。

あつた。懐の広い先生方、懐の広い友人たちに恵まれ、私は何の躊躇も反省もないまま、陸上部、有志ミュージカル、バンド(ほんの少し)とやりた放題の高校生活を過ごさせていただいた。日々重ねた出会いの数々が現在の私を形成している。ある日の世界史の授業で初めて耳にした、「従軍慰安婦」の言葉。当時、教科書にはもちろんのこと、マスメディアにもほとんど登場することのなかった事実を教えられ、大きな衝撃を覚えた。それまでも心に引っ懸